

## 黙示録10章「開かれた巻物」

### 1A 力強い御使い 1-7

#### 1B 主の来臨 1-4

#### 2B 誓い 5-7

### 2A 甘く、苦いことば 8-11

## 本文

黙示録 10 章です。8 章において、第七の封印を小羊が解かれたら七人の御使いがそれぞれラッパを吹き鳴らしました。そして、七つのラッパのうちの最後の三つのラッパが、特に大きな災いです。9 章において、その三つの災いのうちの二つが下りました。底知れぬ所から出て来た、サソリの毒を持ついなごの災いと、大河ユーフラテス川から二億の騎兵による災いです。まさに、生き地獄を地上にいる者たちが味わいました。そして残る災い、すなわち第七のラッパを吹き鳴らす災いがあるのですが、それが吹き鳴らされるにあたって、力強い御使いが出て来て宣言します。

### 1A 力強い御使い 1-7

#### 1B 主の来臨 1-4

<sup>1</sup>また私は、もう一人の強い御使いが、雲に包まれて天から下って来るのを見た。その頭上には虹があり、その顔は太陽のよう、その足は火の柱のようで、<sup>2a</sup>手には開かれた小さな巻物を持っていた。

使徒ヨハネがまた新たな幻を見えています。それは、「もう一人の強い御使い」です。黙示録の中で、既に「強い御使い」が出てきていました。覚えていますか、5 章 2 節です、「また私は、一人の強い御使いが「巻物を開き、封印を解くのにふさわしい者はだれか」と大声で告げているのを見た。」この強い御使いが宣言したのは、巻き物を誰がその封印を解くことができるのか、その資格があるのは誰か？と問いかけていることです。そして、屠られたと見える小羊、死んだけれども、よみがえられたイエスが、世界を贖う力と権威を持っておられることを見ました。そしてこの大きな御使いが、「開かれた小さな巻き物」を持っているのです。つまり、七つの封印が全て解かれたその巻き物を手にしているということです。封印されていた巻き物が今は全開しているということであり、主がこれで世界の贖いを成し遂げようとしている姿です。

そして、この御使いの姿を見てみましょう。その姿は、神とキリストの栄光の姿を色濃く表しています。「雲に包まれて」います。そして、「天から下って来」ています。イエス様が、ダニエル書 7 章で、人の子が天の雲に乗って父なる神の御座のところに近づかれた幻を、大祭司カヤパの前で証言されましたね(マタイ 26:64)。雲に包まれて、天から降りて来るというところに、主ご自身の再臨

の栄光が現れています。そして、「その頭上には虹があり」とあります。主が、ノアに対して水の裁きの後に、契約を結ばれて地を呪うことはすまいとして虹をお見せになりました。虹は、神が裁かれるけれども、けれども新しい世界、新しい秩序、また安息と平安を与えるという希望を示しています。この虹が、預言者エゼキエルが見た、御座の幻のところにありました。(エゼ 1:28)。それから、「その顔は太陽のよう」とあります。1章で、イエス様についてについての「顔は強く照り輝く太陽のようであった」と言っています(1:16)。そして、「その足は火の柱のようで」とありますが、イスラエルの荒野の旅の火の柱を思い出します。主が荒野で宿営の民を守り、また聖さと裁きを表していると言えるでしょう。その姿も、1章で炉の真鍮のようであると描かれていました(16節)。

このように天から降りてこられるキリストの栄光を示す御使いの姿は、まるで地上に再臨する時のキリストのお姿のようであり、事実、そのことを示しているのでしょう。10章には、天からの栄光をこのように描いているのに対して、次回学ぶ11章には獣、反キリストが「底知れぬ所から上って来る(7節)」と書いてあります。天からの栄光と力、地の底からの偽りの栄光と力の対比です。

<sup>2b</sup> 御使いは右足を海の上、左足を地の上に置いて、

これは、海に対しても、地に対しても圧倒的な権威と主権を持っていることを示しています。次の章、11章から13章までに、私たちは獣が出て来て、その背後には竜がおり、竜がイスラエルを表す女を滅ぼそうとし、獣が自分の名の刻印が押されていない者たちを滅ぼすという出来事を読んでいくことになります。しかし、獣は海から出て来て、別の獣が地から上って来る、と13章にあります。しかし、その海も地も、どちらも神とキリストが完全に掌握しておられる、主権を持っておられるということです。

使徒ヨハネが見たこの幻は、ダニエルがかつて見た幻と似ており、ヨハネはそれを想起していたことでしょう。ダニエルが終わりの日の大きな戦についての幻の後で、その中で我が民ユダヤ人が苦難を受けることを知りました。そして、川の水の上にいる亜麻布を来た人に尋ねました。「12:6 この不思議なことは、いつになると終わるのですか。」と言っています。そして、次の答えがありました。「12:7 すると私は、川の水の上にいる、あの亜麻布の衣を着た人が語るのを聞いた。彼はその右手と左手を天に向けて上げ、永遠に生きる方にかけて誓った。「それは、一時と二時と半時である。聖なる民の力を打ち砕くことが終わるとき、これらすべてのことが成就する。」」私たちがダニエル書で学んだ、第七十週目の最後の七年の後半の期間、三年半のことです。この時に、聖なる民、ユダヤ人が試みを受けて、それで打ち砕かれて、メシアを願い求めるようになります。このことを宣言した御使いは、手を天に挙げて、永遠に生きる方を指して誓っています。似たような姿でここ黙示録10章の力強い御使いが永遠の方に対して誓っています(6節)。11章から13章までは、この一時と二時と半時の期間についての預言になっています。

<sup>3a</sup> 獅子が吼えるように大声で叫んだ。

主ご自身が大声で叫ばれることは、黙示録の中で多く出て来ますが、それは主が預言によってはっきりと、誰にでも聞こえる形で語っておられる姿であります。「アモス 3:8 獅子が吼える。だれが恐れなくていられよう。【神】である主が語られる。だれが預言しないでいられよう。」主は、5 章で「ユダの獅子」とも呼ばれていました。

<sup>3b</sup> 彼が叫んだとき、七つの雷がそれぞれの声を発した。<sup>4</sup> 七つの雷が語ったとき、私は書き留めようとした。すると、天からの声がこう言うのを聞いた。「七つの雷が語ったことは封じておけ。それを書き記すな。」

「七つの雷」ですが、七は神を表わす完全数ですから、神からの雷ということです。詩篇 29 篇において、自然界の雷の音が主の栄光を表している、主がまことに王であることを宣言している詩歌になっています。主の威厳と力、そして主がすべての王であられること、そしてご自分の民には平安を与え、祝福を与えられること、これらを示しているのです。主がシナイ山に現れた時には、雷と稲妻がありました。

そして興味深いのは、ヨハネがこの雷の声を書き記そうとしたら、天から声がしてそれを禁じられたことです。ヨハネはこれまで、見たこと、聞いたことを忠実に書き記し、証していましたが、ここで書き記すなと言われていました。これは、「天にある栄光の全てを私たちが知る必要はない。これはあまりにも奇しいことであり、私たちの言葉で表現することもできない」ということでしょう。パウロが第三の天、パラダイスに行ったことを思い出します。「2コリント 12:4 彼はパラダイスに引き上げられて、言い表すこともできない、人間が語ることを許されていないことばを聞きました。」あまりにも素晴らしいので、人間に語ることも、口に出してもいけないのです。私たちは、全ての事を知りたいという欲求がありますが、いや、主の御前に赤子のように黙っているということ、礼拝することが必要なのです(詩篇 131 参照)。

## 2B 誓い 5-7

<sup>5</sup> それから、海の上と地の上に立っているのを私が見たあの御使いは、右手を天に上げ、<sup>6a</sup> 天とその中にあるもの、地とその中にあるもの、海とその中にあるものを造って、世々限りなく生きておられる方にかけて誓った。

御使いは右手を天に上げました。ダニエルの見た御使いは両手を天に上げていますが、ここの御使いは力と権威を表す右手を天に上げています。そして、誓っていますが、これは、議論の余地のない、確実なものであることを保証する時に行うものです。ヘブル書 6 章 16 節には「確かに、人間は自分より大いなるものにかけて誓います。そして、誓いはすべての論争を終わらせる保証

となります。」とあります。今、御使いが永遠に生きておられる創造主に誓っています。今から話すことは、確かに起こることなのです。

<sup>6b</sup>「もはや時は残されておらず、<sup>7</sup> 第七の御使いが吹こうとしているラツパの音が響くその日に、神の奥義は、神がご自分のしもべである預言者たちに告げたとおりに実現する。」

「もはや時は残されておらず」と言っているのですから、これまでは時が残されていた、ということです。主が戻ってこられる時です。父なる神は、その時と日をすでに決めておられるのですが、同時に、「Ⅱペテ 3:9 主は、ある人たちが遅れていると思っているように、約束したことを遅らせているのではなく、あなたがたに対して忍耐しておられるのです。だれも滅びることがなく、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。」とあります。主の忍耐深さのゆえに、私たちにとって主の来臨が遅いように感じられるときが、しばしばあります。この世はますます不安定になっています。ますます、罪と不法がはびこっています終わりの時に起こると言われている事柄を、私たちは今、目にしています。ですから、主が今にでも来られるはずなのですが、まだ来られていません。けれども、主は時を遅らせておられるのではありません。

預言者ハバククがそのように感じていました。彼は、ユダに不法がはびこっているのに、主がお裁きにならないので叫んでいました。主は、バビロンによってイスラエルが裁かれることを明かされました。彼は、そんな、バビロンはユダよりも、もっと悪いです。それで、主が何と答えられるのか、待っていました。これが答えです。「2:3-4 この幻は、定めの時について証言し、終わりについて告げ、偽ってはいない。もし遅くなっても、それを待て。必ず来る。遅れることはない。4 見よ。彼の心はうぬぼれていて直ぐでない。しかし、正しい人はその信仰によって生きる。」ですから、私たちの目には遅いように見えても、主は時を延ばしておられるのではありません。ここの強い御使いが誓ったように、時が来たら、主は速やかに預言を成就されるのです。

そして、強い御使いが天から現われたのは、第七の御使いがラツパを吹き鳴らそうとしていたからですが、11章15節をご覧ください、「第七の御使いがラツパを吹いた。」とあります。そこから主が戻って来られる場面が書かれている19章に至るまで、第七の御使いのラツパの部分となっています。第七のラツパは、ダニエル書9章にある「七十週」の預言の、第七十週目の後半に当たります。最後の週は前半の三年半と後半の三年半に分かれますが、黙示録12章と13章は、その七年間の半ばを軸にして、主が来られるまでの後半部分を扱っています。「その日」と強調されていますが、これは複数形“days”となっています。ですから、24時間ではなく、ある一定の期間で、三年半のことです。

そして、その日には、「神の奥義」が成就する、とあります。神の奥義とは何でしょうか？ 私たちがこの日本語を読んで連想する意味は、「奥深い意味」ということでしょうか。けれどもそうではなく、

ギリシア語では、「以前は隠されていたが、明らかにされるもの」という意味です。パウロは、教会について、異邦人がイスラエルの祝福にキリストにあって共にあずかることを奥義だと話しました(エペソ 3:3-6)。異邦人の救いには完成があり、完成されたらイスラエルがみな救われるということも奥義だと話しました(ローマ 11:25)。コロサイ書には、私たち異邦人の中にキリストがおられることが、奥義だと言いました(1:27)。

そして奥義という言葉は出て来ませんが、ペテロが奥義のことを分かり易く説明しています。「1ペテロ 1:10-12 この救いについては、あなたがたに対する恵みを預言した預言者たちも、熱心に尋ね求め、細かく調べました。11 彼らは、自分たちのうちにおられるキリストの御霊が、キリストの苦難とそれに続く栄光を前もって証したときに、だれを、そしてどの時を指して言われたのかを調べたのです。12 彼らは、自分たちのためではなく、あなたがたのために奉仕しているのだという啓示を受けました。そして彼らが調べたことが今や、天から遣わされた聖霊により福音を語った人々を通して、あなたがたに告げ知らされたのです。御使いたちもそれをはっきり見たいと願っています。」預言者たちには啓示があったのです、けれどもその意味を悟ることが出来ません。ダニエルには、御使いは「封じられている」と言っていました。しかし、キリストにあって今は開示されています。これはあたかも考古学の発見のようです。

私はいつも、ネットのニュースにイスラエルやその周辺で知られていなかった聖書的事実が考古学の発見によって明らかにされるのを驚いています。これまではその存在さえ疑われていたのですが、先端技術のおかげで解明されていなかったものが解明されるようになってきました。元々あったものですが、分からなかったものが明らかにされるのです。そして私たちキリスト者は、キリストにあって解き明かされている啓示を読んでいるのです。そして、預言者たちが語っていることで、まだ明らかにしていないものがあるので、それを完全に開示するところで宣言しているのです。

## 2A 甘く、苦いことば 8-11

<sup>8</sup> それから、前に天から聞こえた声が、再び私に語りかけた。「行って、海の上と地の上に立っている御使いの手にある、開かれた巻物を受け取りなさい。」

4 節で、七つの雷について「書き記すな」と命じた同じ天からの声が、ヨハネに話しかけています。ここでは、受け取って、再び預言しなさいと命じられていきます。

<sup>9</sup> 私はその御使いのところに行き、「私にその小さな巻物を下さい」と言った。すると彼は言った。「それを取って食べてしまいなさい。それはあなたの腹には苦いが、あなたの口には蜜のように甘い。」<sup>10</sup> そこで、私はその小さな巻物を御使いの手から受け取って食べた。口には蜜のように甘かったが、それを食べてしまうと、私の腹は苦くなった。

「それを取って食べてしまいなさい。」というのは、預言を受けて、それを語る時にエゼキエルも命じられたことです。「2:8-10,3:1-3 人の子よ。あなたは、わたしがあなたに語ることを聞け。逆逆の家のように、あなたは逆らってはならない。あなたの口を大きく開けて、わたしがあなたに与えるものを食べよ。」9 私が見ると、なんと、私の方に手が伸ばされていて、その中に一つの巻物があった。10 その方はそれを私の前で広げた。それは表にも裏にも文字が書かれていた。そこに嘆きと、うめきと、悲痛が記されていた。3:1 その方は私に言われた。「人の子よ。あなたの前にあるものを食べよ。この巻物を食べ、行ってイスラエルの家に告げよ。」2 私が口を開けると、その方は私にその巻物を食べさせ、3 そして言われた。「人の子よ。わたしがあなたに与えるこの巻物を食べ、それで腹を満たせ。」私がそれを食べると、それは口の中で蜜のように甘かった。」

同じように、ヨハネはそれを取って食べました。そして口には甘かったのですが、腹に入ると苦かったのです。エゼキエルも同じようにして神から言葉が与えられ、苦々しい思いになっている場面が出て来ます。「エゼキエル 3:14 霊が私を持ち上げ、私を捕えたので、私は憤って、苦々しい思いで出て行った。しかし、主の御手が強く私の上のしかかっていた。」なぜかという、もろもろの民族、国民、国語、王たちについて、神の裁きの預言をしなければいけなかったからです。最後の節、11 節を読みます。

<sup>11</sup> すると私はこう告げられた。「あなたはもう一度、多くの民族、国民、言語、王たちについて預言しなければならない。」

11 章以降に、さらなるひどい災いが書かれています。これまでの黙示録にあったこと同様、これは全世界的な出来事として及びます。多くの民族、国民、言語、王たちに及びます。ヨハネは、これらを語るのはあまりにも苦々しいことですが、御国が来るまでに起こらなければいけない預言は、聖書の中にまだまだたくさんあります。

イエス様が、十字架につけられるとき、「マタイ 26:54 しかし、それでは、こうならなければならないと書いてある聖書が、どのようにして成就するのでしょうか。」と言われたことを思い出してください。福音書は、時系列的に見ると、非常に偏っています。生まれておおよそ 30 歳になられるまでの頃は思いっきり、飛んでいます。そしてその三年半ぐらいの公生涯については、初めの宣教については大雑把に書かれていて、最後の数ヶ月、そして最後の数週間、最後の数日間、そして十字架につけられる前の夜と、次の朝と夕方に至るまでの記述は、かなりの紙面を割いています。なぜなら、そこで起こっている一つ一つの細かい出来事が、主の永遠の救いのご計画の中心部分に入って行くからです。キリストの苦難です。旧約聖書は、その出来事について多くを預言しています。

再臨も同じです。主が再臨されるにあたって、その前に起こらなければいけないことは、再臨が近づけば近づくほどたくさんになっています。イエス様が、オリーブの山で、「『荒らす忌まわしいも

の』が聖なる所に立っているのを見たら」と言われました(マタ 24:15)。ダニエルの預言の第七十週について、聖書はたくさんのことを書いています。第七のラツパが 11 章で吹き鳴らされるのですが、11 章で終わるのではなく 19 章の主の再臨まで続くのです。

神の御言葉には希望があります。それは口に甘いことです。主が全てを支配しておられること、そして主の到来によって正義と平和の国が確立すること。そこに神の至福が備わっていること。全ての悲しみが過ぎ去り、涙もなくなること。新しくされること。これらはすばらしい事です。そして主は必ずそれを行なう、時は遅れることはないと励ましてくださいました。

しかし、それを語るにあたって、荒らす忌むべき者が現れて、彼がキリストによって滅ぼされるということまで語らなければいけない。つまり、さらなる悲しみと涙と苦しみと、神の激しい裁きを語らなければいけないということです。私たちはダニエルと同じように、神に愛された者であり、神に愛されているからこそ、予め示されていることがあります。そして、それを語るという使命があります。聖書を学ぶことは甘い作業です。けれども、それを実践すること、つまり教会の使命として福音を語り、またキリストの体を建て上げていくところには、愛による大きな荷重がかかります。時が終わりになるにつれて、その一つ一つが現実に成就していくのを見るにつれて、その重さに苦みを覚えるのです。最後にパウロがテモテに命じたことを分かち合います。「Ⅱテモ 4:1-2 神の御前で、また、生きている人と死んだ人をさばかれるキリスト・イエスの御前で、その現れとその御国を思いながら、私は厳かに命じます。2 みことばを宣べ伝えなさい。時が良くても悪くてもしっかりやりなさい。忍耐の限りを尽くし、絶えず教えながら、責め、戒め、また勧めなさい。」しっかりと、やってみましょう。